

Title	『ドイツ・イデオロギー』の成立とエンゲルス：online版(暫定版)の編集を踏まえて
Sub Title	Development of The German ideology and Engels' contribution to its construction : a study based on the experience of editing the online edition of The German ideology (provisional edition)
Author	大村, 泉(Ômura, Izumi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2021
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.114, No.1 (2021. 4) ,p.5- 26
JaLC DOI	10.14991/001.20210401-0005
Abstract	<p>2007年来、筆者は、『ドイツ・イデオロギー』のOnline版の編集に取り組んできた。Online版(暫定版)は、現在既に公開中である。本稿では最初にOnline版の編集の目的を明らかにし、次いでその編集方法や編集過程、構成上の特徴をMEGA2 I/5との対比の上で明らかにする。最後に、Online版の編集を通じて明らかになった研究成果の事例紹介を試みる。</p> <p>The author of this paper has been editing the online edition of The German Ideology since 2007. This online edition (provisional edition) is already open to the public. Initially, the author would like to elucidate the purpose of editing the online edition. Next, the paper will clarify the methods, processes, and structural features used for the editing method. Finally, the paper will present exemplars of the research results obtained during this period.</p>
Notes	特集：マルクス主義におけるエンゲルスの貢献
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20210401-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ドイツ・イデオロギー』の成立とエンゲルス
——Online 版（暫定版）の編集を踏まえて——

大村 泉*

Development of *The German Ideology* and Engels'
Contribution to its Construction:
A Study Based on the Experience of Editing the Online
Edition of *The German Ideology* (Provisional Edition)

Izumi Omura*

Abstract: The author of this paper has been editing the online edition of *The German Ideology* since 2007. This online edition (provisional edition) is already open to the public. Initially, the author would like to elucidate the purpose of editing the online edition. Next, the paper will clarify the methods, processes, and structural features used for the editing method. Finally, the paper will present exemplars of the research results obtained during this period.

Key words: Marx, Engels, online edition of *The German Ideology*, dictation, materialistic conception of history

JEL Classifications: B14, P16

本稿は科研費 B（課題番号：18H00834）の研究成果の一部である。

* 東北大学名誉教授

Professor Emeritus, Tohoku University

imario0117@gmail.com

はしがき

2007 年来、筆者は、『ドイツ・イデオロギー』の Online 版の編集に取り組んできた。Online 版（暫定版）は、現在既に公開中である。本稿では、最初に Online 版の編集の目的、編集方法や編集過程、その構成上の特徴を紹介した後、この間得られた研究成果の代表的事例を明らかにしたい。⁽¹⁾

1. Online 版の目的及び編集方法・編集過程／構成上の特徴

1.1 目的

既に公開されている『ドイツ・イデオロギー』の Online 版 (<http://online-dif.com/>) をモニター上に呼び出すと図 1（次ページ）が現れる。筆者がこの Online 版を編集した目的は、MEGA² I/5 の編集者と連携し、MEGA² 同巻とは全く異なるコンセプトの下に、MEGA² 同巻の編集の結果得られた『ドイツ・イデオロギー』第 1 章「フォイエルバッハ」草稿テキスト生成過程に関する様々な知見を、容量無制限の電子版で再構成すること、これに編集者らが独自に得た知見を加え、同草稿のテキスト成立過程の実相を可視化するところにあった（詳細は、Online 版 Preface、及び注 1 に掲げた参考文献、参照）。

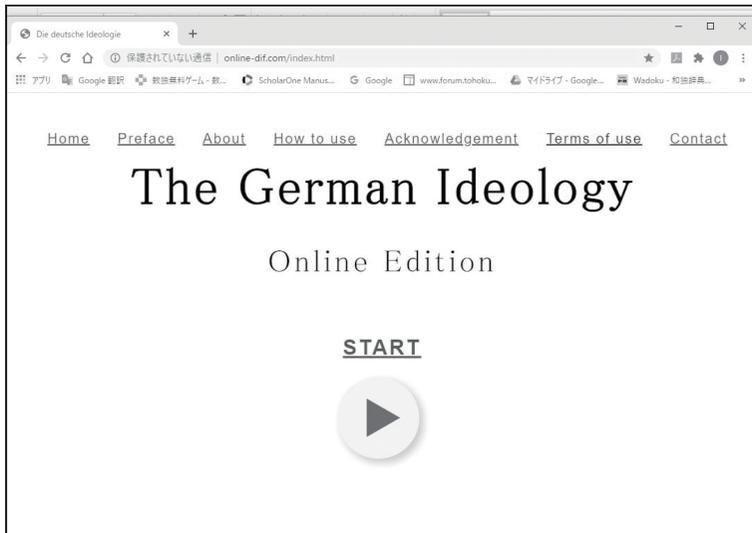
1.2 Online 版（暫定版）の収録草稿

MEGA² I/5 は同章に属する草稿 7 点を H²⁻⁴（序文）、H⁵（フォイエルバッハに関する手稿の束）、H⁶（メモ）、H^{7,8}（[清書稿]断片）と略号で区別する。既に公表されている Online 版（暫定版）に収録したのは H⁵ であり、近い将来 Online 版の完成版には H²⁻⁴（序文）や H⁶（メモ）、H^{7,8}（[清書稿]断片）を含める予定でいる。

H⁵ は H^{5a-c} へと 3 つに小区分される。H^{5a} は B. パウアーのフォイエルバッハ批判へのマルクス／エンゲルスの側からの反批判として起草された草稿で『ドイツ・イデオロギー』第 1 章「フォイエルバッハ」と第 2 章「聖ブルーノ」に再編・補完して収録され、H^{5b} は第 3 章「聖マックス」「旧約

(1) 本稿以下の「1. Online 版の目的及び編集方法・編集過程／構成上の特徴」及び「3. Online 版の編集成果」[3.1 『ドイツ・イデオロギー』草稿のマルクス口述・エンゲルス筆記説]、[3.3 唯物史観の起点]は、大村(2020)の改稿であり、「3.2 黒滝正昭による口述筆記説への批判」は、同「黒滝正昭による『ドイツ・イデオロギー』草稿のマルクス口述・エンゲルス筆記説批判への反論」（『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』第 30 号，2021 年 3 月，収録決定，原稿受理）の「2. führ[te]⇒für に関する黒滝の批判」の改稿である。改稿に際し、元原稿を詳細に展開した。Online 版成立の経緯は、大村他編(2015)，第 2～5 章，及び大村編(2018)，第 5 章，参照。本稿の執筆では、これらも適宜参照されている。

図1 『ドイツ・イデオロギー』 Online 版トップページ
http://online-dif.com/



聖書。ヒエラルヒー」として起草された草稿から抽出され、抽出部分が第1章と第3章当該部分に再編・補完して収録された。H^{5c}は後に第3章「聖マックス」の「新約聖書。ブルジョア社会の歴史」となった部分から抽出され第1章に補完して収録された。

この編集（草稿のリシャッフル）はマルクスが主導した。その際マルクスは第1章の構成部分に1-72の通し番号を振った（3-7及び36-39ページ相当箇所は伝承されていない）。マルクスの通しページが入った草稿紙葉をM1, 2...で表記すると、M1~29がH^{5a}に、M30~35がH^{5b}に、M40~72がH^{5c}に含まれる。M36~39が元々H^{5b}の末尾であったのか、H^{5c}の冒頭であったのかは不明。

問題は、これらの草稿紙葉のテキストがマルクス／エンゲルスによってどのようにして作成されたのか、またマルクスがそれをどのようにリシャッフルして現存するような紙葉になったのか、すなわちMEGA² I/5に収録されたテキストがどのようにして生まれたのか、この一連の過程を時系列に即して可視化する方法を明確にすることである。この場合、MEGA²編集の異文表記に関するキーワード、即時異文（Sofortvarianten, immediate variants）と後刻異文（Spätvarianten, late variants）について一考する必要がある。

1.3 即時異文と後刻異文

マルクス／エンゲルスは、H^{5a-c}の執筆過程で膨大な稿内異文を残している。稿内異文には即時異文と後刻異文があり、(1)即時異文は正書法上最初に完成したテキスト（Online版では基底稿（Grundtext, base text/first draft）と呼ぶ）の生成過程で生まれる。代表例は書き損じや誤記、執筆構想変更に伴う書きさしである。(2)後刻異文は基底稿が推敲され完成稿（Schlussfassung, final text）になる際生

図2 MEGA²の異文表記

105.20	Verkehrsform <schon> an	-----	削除
105.25	: Karthago	-----	
105.27	Jahrhundert <&sw> liefern	-----	
105.32	wird; <sie>	} -----	即時異文
105.33	in <dem>		
105.34	mit <natur>		
105.35	einer früheren Epoche > früheren Epochen	-----	置換
105.36	: & muß	} -----	挿入
105.37-39	: , schon bis sichern		

MEGA²は即時異文と後刻異文を概念的に、また表記上も区別する

まれる削除、置換、挿入からなる。

MEGA²は両異文を概念的に峻別し学術附属資料部 (Apparat) の異文一覧で異なる記号によって表記上も区別する (図2、参照)。

この図2は、MEGA² I/5, S.934 (MEGA² I/5, Apparat) から引いたもので、MEGA²の異文表記を示す。

[後刻異文]

最初に後刻異文の削除、挿入、置換の表記について説明する。図2左端の105.20lは、MEGA² I/5のText部の105ページ、20行目、左欄 (left column) を意味する。当該箇所を参照すると、...entwickeltsten Verkehrsform an, noch ehe diese...となっている。このApparatに示された異文一覧に従うと、この箇所は、基底稿では、...entwickeltsten Verkehrsform schon an, noch ehe diese...となっていたが、推敲過程でschonの一語が削除されたことを、削除されたテキストを<>に入れて、<schon>と表記している。異文一覧で<>内に記入されているテキスト (複数の単語やセンテンス、段落となる場合もある) は、いずれも基底稿には存在するが、推敲過程で削除され最終テキストには存在しない。

次の105.25lの |:Karthago:|は、MEGA² I/5のText部の105ページ、25行目、本文左欄の...Handelsstationen sind. Karthago, die griechischen...におけるKarthagoが後からの挿入であったことを表記する。つまり、異文一覧で |: :|という記号の間に組み込まれて表記されているテキスト (複数の単語やセンテンス、段落となる場合もある) は、推敲過程で基底稿に挿入され、最終テキストで存在するようになった。これは基底稿には含まれないテキストでもある。

105.35lの einer früheren Epoche > früheren Epochen は、MEGA² I/5のText部の105ペー

図3 MEGA²の異文表記(行並記法による)

70.39-71.21	1 tritt der Widerspruch zwischen dem Produktionsinstrument &
	2 ist " " " " "
	1 Privateigentum erst _____, wenn _____ sie
	2 " " ihr Produkt, zu dessen Erzeugung "
	1 bereits ^a — entwickelt ist, hervor.
	2 " ^b sehr " " sein muß.

ジ、35行目、本文左欄の früheren Epochen behaftet war, kann は、基底稿では、einer früheren Epoche behaftet war, kann と表記されていたが、推敲段階で基底稿の früheren Epochen behaftet war, kann と書き換えられたこと、つまり、einer früheren Epoche が früheren Epochen に置換訂正されたことを表記している。

まとめると、後刻異文は削除、挿入、置換からなり、全ての MEGA² の巻の異文一覧で、〈◎〉(◎の削除) ; |:◎:| (◎の挿入) ; ○ > ◎ (○の◎への置換) という記号で表記されている。○ > ◎ は、基底稿の○というテキスト(複数の単語やセンテンス、段落となる場合もある)が最終テキストで◎というテキスト(複数の単語やセンテンス、段落となる場合もある)に置換訂正されたことを意味する。ちなみに、105.271 は削除、105.361 及び 105.37-391 は挿入である。後者は、本文 37 行目末尾の、コンマから 38 行目の schon 以下を挟み 39 行目の sichern までが挿入であることを意味する。

[即時異文]

これに対して、105.321 wird; 〈sie〉は、MEGA² I/5 の Text 部の 105 ページ、32 行目、本文左欄の wird; の後には、草稿では、sie という即時異文があること、つまり草稿では、wird; に続けて sie と書かれたが、それがすぐ消されていることを示す。即時異文は、執筆中断を意味する記号、で示される。

105.331 in 〈dem〉は、MEGA² I/5 の Text 部の 105 ページ、33 行目、本文左欄の in の後には dem の即時異文があること、つまり草稿では、当該箇所では in に続けて dem と書かれ、それがすぐ消されていることが示されている。105.341 mit 〈natur〉は、MEGA² I/5 の Text 部の 105 ページ、34 行目、本文左欄の mit の直後に即時異文 natur があること、つまり草稿では、当該箇所では mit に続け natur と書かれ(単語の末尾まで書かれずに)、すぐ消されていることが示されている。即時異文はこのようにして示されるが、行並記法で示される場合もある(図3、参照)。

ここで記号 " は第1行目の単語が第2行目でも維持されていることを意味する。この場合、第2行目として示されているテキスト、つまり、[in der großen Industrie] ist der Widerspruch zwischen dem Produktionsinstrument & Privateigentum erst ihr Produkt, zu dessen Erzeugung bereits

sehr sie entwickelt sein muß. ([大工業では] 生産用具と私的所有との矛盾が初めて大工業の産物になるが、その産物になるには大工業が既に大きく発展している必要がある) は、基底稿 (同時に最終テキスト) で、第 1 行目のセンテンス全体がこの基底稿の即時異文であることを意味する。

即時異文は、正書法上 (文法的に) 完成したテキスト (基底稿) の執筆の際生じる異文だが、ここでは、MEGA² 編集者は、動詞 hervortreten (分離動詞) が sein 動詞 (ist) に変更されたことに着眼し、tritt...hervor という一文を ist...muß. の即時異文と判断している。即時異文のみ抜き出すと、[in der großen Industrie] tritt der Widerspruch zwischen dem Produktionsinstrument & Privateigentum erst, wenn sie bereits sehr entwickelt ist, hervor ([大工業では、] 大工業が既に大いに発展している場合に初めて生産用具と私的所有との矛盾が現れる) となる (sehr は後からの挿入)。

基底稿と比べると、行並記法で明示されているように、即時異文: [in der großen Industrie] tritt der Widerspruch zwischen dem Produktionsinstrument & Privateigentum erst, wenn sie bereits sehr entwickelt ist, hervor の網掛け部分のテキストが削除され、当該箇所が基底稿: [in der großen Industrie] ist der Widerspruch zwischen dem Produktionsinstrument & Privateigentum erst ihr Produkt, zu dessen Erzeugung bereits sehr sie entwickelt sein muß. で枠囲いしたテキストに変更されたことが分かる。

MEGA² の諸巻の本文 Text 部と Apparat 部の異文一覧とを参照比較すると、後刻異文についてはピンポイントでどのようなテキスト (単語、複数の単語、センテンス、段落) が削除、置換、挿入されたのかが分かる。また両者を参照すると、後刻異文と区別される即時異文の存在が明らかとなる。他方、Apparat 部の異文一覧から、後刻異文はピンポイントで当該箇所を知ることができるが、即時異文はどの箇所が削除されたのかは、本文 Text 部と Apparat 部の異文一覧との照合、あるいは行並記法の表記を丁寧に検証する必要がある、MEGA² における両異文のこうした表記法の違いは Online 版での再構成の際十分留意する必要がある。

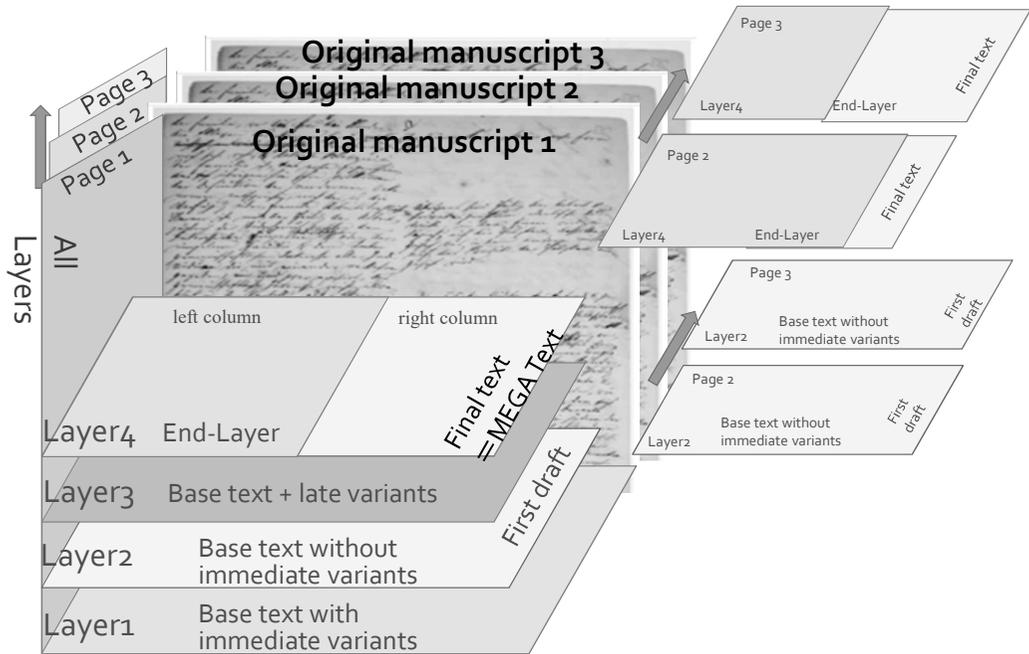
さて、MEGA² での異文の概念区分に従うと、草稿の執筆は基底稿を境に 2 つに時期区分される。第 1 は著者の頭に芽生えたアイデアが即時異文を伴いながら紙上に写され不要異文が削除され基底稿が成立するまで。第 2 は基底稿に後刻異文が加わり MEGA² テキスト部に収録された最終テキストが完成するまでである。Online 版編集のスプリングボードはここにあった。Online 版は H^{5a-c} のテキスト成立過程を図 4 のように Layer 方式を用いて可視化した。

1.4 Layer2 の編集

Online 版編集は基底稿 (図 4 の Layer2) の編集から始めた。

M1~72 の最終テキストは先行版テキスト部に収録されている。H^{5a-c} には『ドイツ・イデオロギー』第 2, 3 章に転用されたり、転用先は不明だが抹消されたために最終テキストが Apparat で再現されている部分が数ページ分ある。

図 4 Layers の構造



草稿は全紙を二つ折りし、4 ページ立てにしたもので、最初バウアー批判として書かれていた草稿が第 1 章及び第 2 章に分割転用された。シュティルナー批判として書かれていた草稿から 2 カ所が抽出され第 1 章に転用された。バウアー批判テキストの第 1, 2 章への分割転用、特に第 2 章への転用では、段落順序を入れ替えての転用や、草稿では表裏に書かれたテキストの部分転用等があり、エンゲルスが新たに清書をするほかなかった。シュティルナー批判テキストからの抽出転用でも同じことが生じていて、ここではヴァイデマイヤーが、抽出された草稿で第 1 章に転用されなかった部分を第 3 章に転写して戻している。上に記した通り、H^{5a-c} の原型は、こうした第 2, 第 3 章への転用テキストや転用されず単純に抹消されたテキストを含む。Online 版はこれらも忠実に拾い上げ H^{5a-c} の全ての最終テキストを再現した（この草稿テキスト転用の詳細は、大村 (2019) 巻末に収録した『『フォイエルバッハ章のための草稿の束』ページ付け図解』、参照）。

この再現を完了した後、次の恒等式を念頭に置いて、基底稿を編集した。

最終テキスト = 基底稿 + 後刻異文の諸要素

基底稿 = 最終テキスト - 後刻異文の諸要素

後刻異文の諸要素：削除、置換、挿入

この恒等式から、再現した最終テキストを出発点に、そこから MEGA² の Apparat で、ピンポイント方式によって一括表示されている①削除部分を元に戻し、②置換箇所は置換されたテキストを削除して置換前のテキストを挿入、③逆に挿入箇所は挿入テキストを削除すれば、基底稿のテキ

ストが入手できるのは明白である。

こうして伝承されている H^{5a-c} 全ページの Layer2 (基底稿テキスト) を、可視化し通読可能なテキストとして再現することができた。また IISG (社会史国際研究所・アムステルダム) で撮影した草稿の精細画像に基づき改行箇所を草稿に準じるものとした⁽²⁾。

1.5 Layer1, Layer3~All layers

Layer1 の編集では、先行版の異文一覧に基づいて、基底稿 (Layer2) のテキストに、即時異文の削除箇所を黄色にマークして組み入れた。編集途上で MEGA² I/5 編集者から提供された校正刷りを参照し、マーク箇所を補強した。この補強では IISG で入手した草稿精細画像との照合がたいへん有益であり、MEGA² I/5 の情報を数十カ所補完した。

基底稿は例外なく二つ折り用紙の左欄に書かれている。マルクスの筆跡は基底稿では M25 の 6 行だけだが、後刻異文はそうではない。Layer3 は左右 2 欄構成で基底稿 + 後刻異文テキストを収録する。草稿の右欄記載の後刻異文は右欄テキスト (Layer3-1, 2... (R)) で再現し、再現場所も左欄テキスト (Layer3-1, 2... (L)) との対応に工夫し原草稿記載場所の再現に留意した。

Layer1, 2 と同様 Layer3 もマルクス／エンゲルスの筆跡の違いはフォント (エンゲルス: Times New Roman; マルクス: Arial) で区別した。また、右欄記載の後刻異文テキストのフォントを青色にした。エンゲルスの筆跡で草稿左欄に記入された後刻異文は Layer3-1 (L) で、右欄記入は Layer3-1 (R) で再現した。Layer3-2 (L, R) ではマルクス筆跡の後刻異文を Layer3-1 (L, R) に組み込み再現した。少数だが、Layer3-3, 4 (L, R) も存在する。これは、マルクス／エンゲルスが、Layer3-2 (L, R) の後から補訂を行った場合である。後刻異文の削除テキスト (単純削除及び置換削除) は灰色、置換後テキストはピンク、挿入テキストは緑でマークした。

Layer3-Ende1 では記載箇所は右欄だが、基底稿の修・訂正のために書かれた後刻異文は左欄に組み入れた。フォントの彩色 (青色) は保持した。削除テキストは削除、置換後テキストや挿入テキストのマークは削除した。マルクスが H^{5a-c} で第 1 章のページ付けとして記入した 1~72 を Arial で追加した。Layer3-Ende2 では第 2 章に転用使用することにした箇所を削除した。

Layer4 (End-Layer) は Layer3-Ende1 (2) のフォントの彩色 (青) を抜いた。このテキストは MEGA² I/5 に収録された最終テキストと同一。改行箇所は草稿に準じ、マルクス／エンゲルスの筆跡の違いを示すフォントの相違は維持した。All layers は草稿オリジナルの全ての削除箇所 (即時異文の削除箇所、後刻異文の削除箇所、草稿のリシャッフルで生まれた削除箇所、等) を灰色でマークして Layer3-Ende1 直前の Layer3-2, 3, 4 (L, R) に取り込んだ。All layers のテキストは、草稿の記載状態を最も近似的

(2) Online 版の編集グループは、MEGA² I/5 先行版のデジタルテキストを MEGA² 編集者から提供され (先行版及び MEGA² 版の最終テキストは同一)、同時に社会史国際研究所 (IISG) から関連する全草稿の撮影を許可された。この詳細は、大村他編 (2015)、第 2~5 章、参照。

に反映した解説原稿になる。

2. MEGA² I/5 と Online 版

『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォイエルバッハ」草稿の原語による公表は Rjazanov 版 (1926) を嚆矢とする。MEGA² I/5 によれば同版以来草稿の配列に大きな違いのある版が原語で 9 種公刊されている。⁽³⁾ Online 版は 10 番目の試みになる。盛り込まれている情報を個々別々に取り出せば、MEGA² I/5 と Online 版とに大差はない。しかしながら次の 3 点において Online 版は従来の紙媒体の刊本とは全く異なる。

第 1 に、Online 版の Layer1 及び Layer2 のテキストは、MEGA² I/5 のテキスト部と Apparat の異文一覧を上記のように再構成しない限り入手できない。両テキストは Online 版によって初めて可視化され通読可能となった。

第 2 に、MEGA² I/5 の異文一覧では、2 つの異文、即時異文と後刻異文の概念区分は表記上も明白だが、いずれも全く無媒介に、MEGA² I/5 の final text に関連付けられていて、異文の概念区分が積極的な意味を持たない。実際、「1.3 即時異文と後刻異文」に掲げた MEGA² Apparat の異文一覧では、異文は、Verkehrsform <schon> an, |:Karthago:|, einer früheren Epoche > früheren Epochen,あるいは in <dem>として表記されていたのであって、これだけを読み、その含意を掴むことはドイツ人であっても不可能である。しかしながら Online 版では、即時異文は Layer1 でそれが生まれた基底稿とのみ関連付けられており、それがなぜ削除／置換されたのか、また挿入されたのかを直接の結果である基底稿と関連させて考察できる。後刻異文もまた、その直接の出発点となった基底稿と関連させてその性格を論じることが可能となる。異文がテキストに直接組み込まれてマークされているので、テキスト部と Apparat の異文一覧をその都度交互に参照することなく検討可能で、ドイツ語以外の言語にも翻訳が可能である。

第 3 に、Online 版の解説原稿は、草稿オリジナルの精細画像と照合が常時可能である。同一サイト内では 25 ページだけだが、IISG のサイトにアクセスすれば全ページと同一のモニター上で照合可能であり、読者が解説原稿の内容や配置、注解に疑義が生じた場合、読者自身が確認できる。

(3) MEGA² I/5 の解題 (Einführung) では、この試みの第 9 度目が MEGA² I/5 であることを明記し、第 1～6 度目、第 8 度目の試みについて、1～6 及び 8 の番号を付けて詳しく記している。しかし、第 7 度目の試みは言及されていない。第 7 度目は、第 6 度目の MEGA² 試作版 (1972) と第 8 度目の MEGA² I/5 先行版 (2004) の間に刊行された試みで、これは廣松渉版 (1974) 以外に該当する版は存在しない。MEGA² I/5, Einführung, 参照。なお、この全文訳は、玉岡 (2019) である。ちなみに、MEGA² 同巻の研究文献欄で紹介されている文献に、アジア系 (日本、韓国、中国) の文献が皆無であることは奇異と言うほかない。

3. Online 版の編集成果

3.1 『ドイツ・イデオロギー』草稿のマルクス口述・エンゲルス筆記説

『ドイツ・イデオロギー』草稿がマルクスの口述をエンゲルスが筆記したことで成立した、という⁽⁴⁾仮説はH^{5c}のLayer1の編集集中に生まれた。

H^{5c}のLayer1(基底稿+即時異文)にはマルクスの筆跡は皆無である。Layer1は著者が自分自身の頭脳にあるテキストを紙上に最初に写したものであって、通常はこの筆跡を根拠に著者同定が行われる。H^{5c}にはページ付けを除けば、マルクスの筆跡は後刻異文が15カ所、それも短文に過ぎない。これだけだと、H^{5c}の執筆で主導権を握っていたのはエンゲルスである。これは、Rjazanov(1926)が先鞭を付け、廣松(1974)が徹底し、Bendien(2018)が最近改めて主張している推定である。しかしこの推定には2つの難点がある。

第1は即時異文の数である。即時異文は書き損じや誤記、執筆構想変更に伴う書きさしだが、これは文章を頭の中で反芻してから書くタイプだと少なくなり、書きながら考えるタイプだと多くなる。エンゲルスは前者の、マルクスは後者の典型である。ところが、即時異文の出現数を草稿で指折り数え、出現頻度をMEGA²本文テキストの通常のフォーマット(横1段組み、1ページ41行換算)で比べると、H^{5c}の即時異文の出現頻度は同時期のエンゲルス単独稿の約7倍($17.3 \div 2.5 = 6.92$)、マルクス単独稿と比べても2倍弱($17.3 \div 9.2 = 1.9$)あった(表1、参照)⁽⁵⁾。

第2に6カ所もの同音異義語の混同である。MEGA²の異文一覧では即時異文(削除異文)は異文直前の見出し語に続けてピンポイントで示されることが多く、異文一覧を読むだけだと内容は不明である。Online版のLayer1編集では基底稿に削除異文を組み入れたので削除異文が直後でどのように訂正されたのかが明らかになった。この結果H^{5c}には同音異義語の訂正が6カ所あった(図5、参照)。

この混同には接続詞(daß)の冠詞/関係代名詞(das)への、及びその逆の、動詞(führen)の語幹führ)の前置詞(für)への訂正があった。ドイツ人が著者であり、同時に筆記者でもあった場合、

(4) 筆者がこの『ドイツ・イデオロギー』「フォイエルバッハ」章草稿のマルクス口述/エンゲルス筆記説を初めて活字で提唱したのは、大村(2017)であり、Omura(2017)は同年リヨン(フランス)で開催された国際会議で報告したその骨子(英文)である。大村編(2018)には、大村(2017)を改稿しタイトルを「第5章 唯物史観の第1発見者」として収録した(pp.76~120)。Omura(2018)は、この国際会議報告を詳論したものである。この英字論文を含む英文誌は2020年に単行本としてe-book及び紙版で公表された。Omura(2020)はこの単行本に収録された論文で内容的にOmura(2018)と同一である。この間、Omura(2017)には韓国語訳が、大村編(2018)「第5章 唯物史観の第1発見者」には中国語訳が出ている。

(5) この表については大村編(2018)、特にその第5章第IV節「即時異文の量的対比」(pp.93~97)、参照。

表1 エンゲルスの他の草稿にはみられないH^{5c}の即時異文数とその出現頻度

原草稿	H ^{5c} (M40-72)	Eine Seeräuberge- schichte (1836-1837)	Cola di Rienzi (1840-1841)	Zur Kritik der preußischen Preßgesetze (1842)	Ökonomische- philosophische Manuskripte (Heft I: XXII-XXVI) (1844)	Ökonomische- philosophische Manuskripte (Heft II: XL-XLIII) (1844)
(1) 草稿オリジナルの 即時異文数	433	32	37	9	118	57
(2) 草稿オリジナルの ページ数	33	16	26	10	5	4
(3) 草稿1ページあたり の即時異文に出現頻度: (1)÷(2)	13.1	2	1.4	0.9	23.6	14.3
(4) 通常のMEGA ² の フォーマットで草稿を 再現した時要する ページ数	25 (MEJ2003, MEGA ² I/5: 52ページ)	12	12 (MEGA ² I/3: 24ページ)	7	13	6
(5) 通常のMEGA ² のフ ォーマットで草稿を再 現した場合の、1ペー ジあたりの即時異文の 出現度: (1)÷(4)	17.3	2.7	3	1.3	9.1	9.5
エンゲルス単独稿の平均出現頻度: 2.5 [[(32 + 37 + 9) ÷ (12 + 12 + 7) = 2.5]]					マルクス単独稿の平均出現頻度: 9.2 [[(118 + 57) ÷ (13 + 6) = 9.2]]	

これらの訂正はまずありえない。なぜこうした誤りが生じたのか。H^{5c}がマルクス口述／エンゲルス筆記によって成立したからだ。複数箇所の同音異義語の書き誤りはこれ以外に合理的な説明方法はない。H^{5c}の膨大な即時異文数もこれ以外の方法では説明できない。

他方、筆者は、Mayer (1920)が最初に主唱し、MEGA¹ (旧MEGA)、MEW (『マルクス／エンゲルス著作集』: 日本語版『マルクス＝エンゲルス全集』)、MEGA² 編集者らが踏襲した、『ドイツ・イデオロギー』のマルクス／エンゲルス共同執筆説もまたエンゲルス執筆主導説と同様の矛盾に直面すると考えている。この説では、マルクスの筆跡が植字工にも呆れられるほど悪筆であったことから、マルクス／エンゲルスの二人は事前に議論し、議論の成果をマルクスより遥かに読みやすい書体で文章を綴るエンゲルスが取りまとめたのだ、とされる。しかし、もしこの推定が妥当で、しかも基底稿の執筆過程でマルクスの口述がない、すなわちエンゲルスが、マルクスと同意した(したがってエンゲルスの考えでもある)前もって十分討議された脈絡やマルクスと共同して起案した諸節を、自発的、主体的に基底稿として紙上に書いたのなら、そこでの即時異文が、直前に執筆されたエンゲルス単独稿 (MEGA I/3², 収録) の約7倍になり、その出現頻度が、マルクス単独稿 (『経済学＝哲学草稿』など、MEGA I/2², 収録) の2倍弱となり、ほかに、„das“ (冠詞ないしは関係代名詞) と „daß“ (接続詞) との混同という、ドイツ人ならまず間違えない同音異義語の混同が一定数存在したりするようなことが果たしてありえるのか、というエンゲルス主導説と全く同じ矛盾に直面することになるからである。⁽⁶⁾

H^{5a,b} は十分検討していない——これについては Online 版で読者諸兄姉に検証をお願いしたい

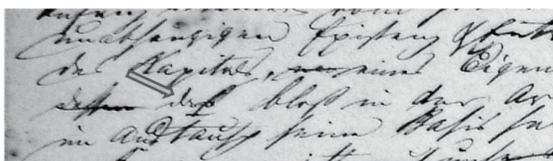
図 5 混同例

同音異義語の混同の訂正事例

※網掛けは削除，枠囲いは置換，下線は挿入を意味する。改行は草稿に準じた。

M42：接続詞／関係代名詞

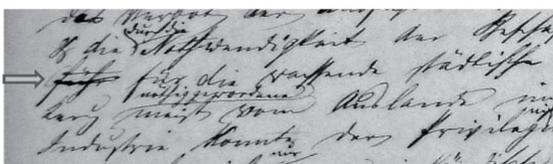
daß > das



des Kapitals, da eines Eigenthums
~~dessen~~ daß das bloß in der Arbeit &
 in Austausch seine Basis hat

M48：動詞／前置詞

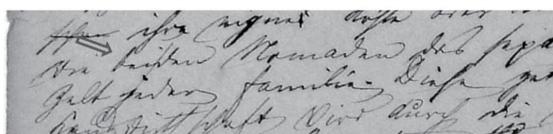
führ > für



& die durch die Nothwendigkeit der Beschäftigung
führ für die wachsende städtische Bei Bevöl-
kerung nöthig gewordene meist vom Auslande importirte
 Industrie konnte der Privilegien nicht entbehren, die...

M53：代名詞／前置詞 + 冠詞

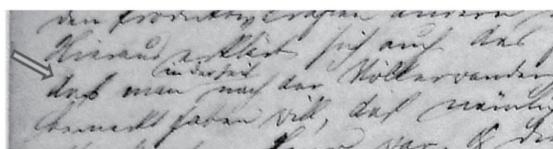
beiden > bei den



wie beiden bei den Nomaden das separate
 Zelt jeder Familie. Diese getrennte

M64：接続詞／関係代名詞

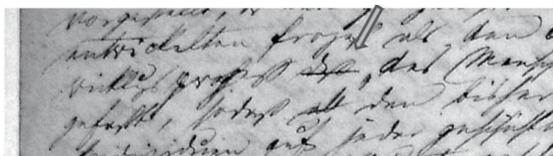
daß > das



Hieraus erklärt sich auch das Faktum
~~daß~~ das man nach der Völkerwanderung überall
 bemerkt haben will,...

M68：副詞／冠詞

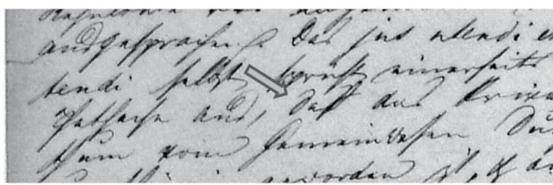
deß > des



entwickelten Prozeß als den Ent-
wicklungsproß [Entwicklungsprozeß] deß des Menschen“
 gefaßt, sodaß all den bisherigen

M71：冠詞／接続詞

das > daß



ausgesprochen. Das jus utendi et abu-
 tendi selbst spricht einerseits die
 Thatsache aus, das daß das Privateigen-
 thum vom Gemeinwesen durchaus
 unabhängig geworden ist,...

——が、即時異文の頻出度は H^{5c} と大きな相違はないのでマルクス口述／エンゲルス筆記があったとみるべきだ。橋本直樹はこの仮説を全面的に肯定し、同時に廣松らの『ドイツ・イデオロギー』執筆におけるエンゲルス主導説の「終焉」を断じた。⁽⁷⁾

3.2 黒滝正昭による口述筆記説への批判

橋本はこの口述筆記説を全面的に肯定した。しかし、2020年3月に『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』であった黒滝正昭の批判は全否定であった。

筆者は、前記橋本書評へのリプライで、黒滝の批判は「思弁に思弁を重ねたもの」であり、到底受け入れることはできないこと、また上掲誌の編集委員会が、臨時の編集会議を開催し筆者の反論権を認め同誌第30号（2021年3月刊）で反論が掲載される、と述べた。

以下では黒滝の批判がこの「リプライ」で指摘した通りであることをこの投稿済み反論に基づいて紹介する。図6は図5のM48を拡大したもので、動詞と前置詞の混同訂正が認められる箇所である。混同訂正は楕円で囲った部分である。この部分を含む図6の矢印に挟まれた部分の解説原稿は図の下に置いた通りである。参照の便宜を考えて、改行箇所は画像に準じた。この解説原稿での記号は図5と同一。網掛けは削除、枠囲は置換、下線は挿入。新たに加えた波線を引いたテキストは、黒滝が恣意的に変更したり、飛ばして引用した部分。

図6をみると、挿入は全て挿入線を引いて挿入しているのが分かる。ここで最も重要なのは、画像で3行目、解説原稿では2行目の冒頭のführ, つまり動詞führenの語幹が、二重の取り消し線によって削除され、直ちに前置詞fürへ置換されていること、つまり同音異義語の訂正がなされているところにある。

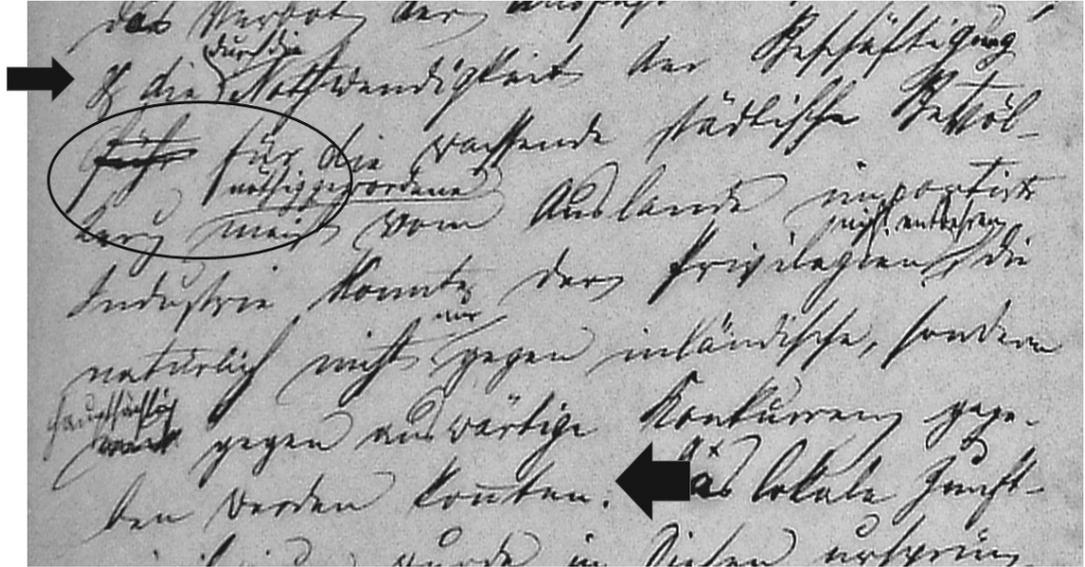
この削除置換は、草稿画像をみる限り、明白な事実である。しかし、黒滝によればここで、同音異義語の訂正が行われていると判断するのは、「非常に不自然な想定」(黒滝(2020), p.48)である。

黒滝は私見を批判して、「ドイツ語にもイントネーションというものがあるから、発音が同じであってもイントネーションで相手に違いが伝わる」、「マルクスが読み上げたにしろエンゲルスが読み上げたにしろ、口頭で述べるまとめ案は常に筆記より早く、数段先に進んでひとつの意味上の区切りまでは行くはずである(例えばこの場合、die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien まで行くなど)。訂正は、それを確認しつつ読み上げ・

(6) 以上の詳細は、大村編(2018)、特にその第5章「唯物史観の第1発見者」の「序論」(pp.76~82)及び同第VI節「検証結果」(pp.104~108)、参照。この後者では、基底稿執筆に関するイニシアチブがエンゲルスであった、という立場に立ちながら、「マルクス／エンゲルスの草稿執筆前の打ち合わせが十分ではなく、エンゲルスは絶えずマルクスの意見を聞きながら基底稿を執筆した。だから多数の即時異文が生まれた」とする推定についても、その成立は即時異文の性格からありえないことを解明している。併せて参照されたい。

(7) 橋本(2019)、参照。

図 6 M48 拡大図



& die durch die Nothwendigkeit der Beschäftigung
führ für die wachsende städtische Bet Bevöl-
kerung nöthig gewordene meist vom Auslande importirte
Industrie konnte der Privilegien nicht entbehren, die
natürlich nicht nur gegen inländische, sondern
nur hauptsächlich gegen auswärtige Konkurrenz gege-
ben werden konnten.

筆記している間にまた別の考えが生じて、議論が起こり、合意に達して生まれるものであろう」(黒滝(2020), p.48), と言うのである。

先にも述べたが、筆者はこの黒滝の批判は思弁に思弁を重ねたものであって、到底受け入れることができない。第1に、「ドイツ語にもイントネーションというものがあるから、発音が同じであってもイントネーションで相手に違いが伝わる」として、黒滝が、エンゲルスは同音異義語を間違えることを原則的に否定しているからである。口述筆記の際、同音異義語を聞き違えることがない、エンゲルスにはありえない、というのが黒滝の批判の出発点にある考えだが、これはありえない想定であろう。

第2に、「口頭で述べるまとめ案は常に筆記より早く、数段先に進んでひとつの意味上の区切りまでは行くはず」だ、と何の具体的な根拠もなく勝手に推断し、ここでは、波線を引いたテキスト部分を恣意的に変更したり、飛ばして、「マルクスが読み上げたにしろエンゲルスが読み上げたにしろ、…(例えばこの場合、die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegienまで行く)」としているからある。変更で看過できないのは、草稿の führ が führte となっていることだ。führ は動詞 führen の語幹である。ドイツ語の動詞語幹は文脈に応じて活用語尾が変化する。この場合

führte と記載されるのが正書法上正しい。しかし、草稿当該箇所は、führen の語幹 führ のみが記された後削除され、前置詞 für に置換されその後に meist vom Auslande ではなく、die wachsende städtische.....が続いている。「この場合、die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien まで行く」という黒滝の推断は事実による裏付けが全くない⁽⁸⁾。ここでは、原文は、Industrie 直後の konnte der が den に変更されているのも明白だ。

「訂正は、それを確認しつつ読み上げ・筆記している間にまた別の考えが生じて、議論が起こり、合意に達して生まれるものであろう」と黒滝は言う。だがこの黒滝の想定が正しいならば、MEGA² I/5 に収録された草稿とは別の（マルクス／エンゲルスいずれか出所不明の）黒滝の主張に合致した草稿が存在するはずだ。このような草稿は未確認である。黒滝があくまで自説の正当性に固執するならば、MEGA² I/5 に収録された草稿とは別の草稿が存在すること、その草稿テキストは黒滝が主張するテキストと同一であることを実証する必要がある。このような黒滝の批判は学術的に正当化されるものではない。あくまで思弁に思弁を重ねた批判として理解されるほかあるまい⁽⁹⁾。しかし、この草稿が見つかったとしても、MEGA² I/5 に収録された草稿当該箇所ではエンゲルスが同音異義語の訂正をした事実は不変である。この場合にも黒滝の批判は批判として成立しないのである。

ここでの問題の核心は、この同音異義語の削除訂正だが、なぜこうした訂正が生じたのか、筆者は次のように考える。

マルクスが die Nothwendigkeit der Beschäftigung für を口述したとき、für でやや間を置いたからか、die Nothwendigkeit der Beschäftigung が当初の文脈では主語、ドイツ語では、主語に続くのは通常動詞であることから、マルクスの口述を聞いたエンゲルスは、動詞 führen の語幹 führ と続けてしまった。しかし続いてマルクスの口から出た die wachsende städtische Bet Bevölkerung を聞いて、エンゲルスは慌てて自身の誤りに気づき führ を前置詞の für に訂正したのであろう。もし die Nothwendigkeit der Beschäftigung が主語ではなく当初から長文の冠飾句の druch die Nothwendigkeit der Beschäftigung... importirte の一部であったならこのような誤りは生じなかったであろう。

3.3 唯物史観の起点

唯物史観の起点をどこに求めるかについて、国際マルクス／エンゲルス財団事務局長の G. フーブ

(8) 渋谷（大村編(2018)、第6章）は、大村の口述筆記説を支持したとき、草稿に残存する同音異義語の混同は、「口述筆記によるエンゲルスの聞き誤りと考えるのが、もっとも自然なように思われる」と述べた。黒滝はこうした渋谷に対して、「そもそもそういう聞き誤りはありうるのか？」と、疑問を持ってしかるべきで、このような疑問を持たないこと自体に問題がある、と批判している（黒滝(2020)、p. 58、参照）。要するに、黒滝は、エンゲルスには、同音異義語を聞き誤ることはない、という固い信念があるようだ。しかし口述筆記の場合、同音異義語で「聞き誤り」がありうるのは洋の東西を問わない。

マンは、MEGA² I/5 の刊行を公知したプレスリリースで、従来説のように、唯物史観の基本原則がフォイエルバッハ批判を通して発展させられたというのは正しくなく、当時のドイツの哲学界を席卷していたシュティルナーやパウアー、社会主義的諸潮流との論争、特にシュティルナー批判を通してであった、とした。

この新説に対して、大村編(2018)で大村、渡辺、渋谷は、従来説の正当性を強調した。これは、Online 版の編集を通して、『ドイツ・イデオロギー』で唯物史観の確立の指標としてしばしば引証されるテキスト箇所が H^{5c} ではなく H^{5a} の Layer1, 2 にあり、当該箇所では、批判対象がパウアーではなくフォイエルバッハにあることが繰り返し明言されていたから、つまりフープマンの新説は事実による検証に堪えないことが明らかだからであった。ちなみに Online 版の編集で、H^{5a} の唯物史観に関連する Layer1, 2 の記述が『ドイツ・イデオロギー』の起筆に約半年先行して成立したフォイエルバッハに関するテーゼを直接引証する形で開始されている事実も明確になった。⁽¹⁰⁾

3.4 資本主義下の分業（社会的分業）と共産主義社会での消失

最後に Online 版を使った『ドイツ・イデオロギー』テキストの読み返しをしてみよう。『ドイツ・

-
- (9) MEGA² のテキストとして用いられる草稿類は、MEGA² Apparat の *Zeugenschreibung* で完成度の順に「Exzerptheft (抜粋), Notizbuch (メモ), Entwurf (草案), Reinschrift (清書), Abschrift (写本), Druckvorlage (印刷用原稿)」という性格付けがされる (Grandjonc (1993), 4 *Zeugenbeschreibung*, 参照)。MEGA² I/5 の *Zeugenschreibung* では、草稿 H^{5c} は H^{5a,b} と共に、Reinschrift und Entwurf (清書及び草案) と性格付けられている (MEGA² I/5, S. 850)。他方、H^{5b,c} はいずれもシュティルナー批判の H¹¹ から抽出され、第 1 章に移された部分である。H¹¹ を MEGA² I/5 の *Zeugenschreibung* は Druckvorlage (印刷用原稿) と性格付けている (MEGA² I/5, S. 1068)。MEGA² I/5 の編集者は、草稿 H^{5b,c} のテキストは、「印刷用原稿」(入稿原稿) にまで整備されていたが、第 1 章に転用されたために未定稿的な様々な書き入れが入り、手入れが入った部分を含め全体が未完成であることから、Druckvorlage (印刷用原稿) と性格付けをすることはできないと考え、その前段階の Reinschrift und Entwurf としたのであろう。MEGA² I/5 の編集者のこうした判断を踏まえればなおのこと、黒滝のような草稿の成立過程が実際にあったと考えるのは無理がある。黒滝が自説に固執するなら、現実にも die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien と書かれた草稿が存在することを実証する必要がある。ここで問われているのは草稿の完成度ではなく、そのような事実が実際に存在するかどうかの問題だ。これができない限り、黒滝の私見批判は学術的な正当性を欠く。ちなみに、Druckvorlage (印刷用原稿) や Reinschrift (清書) という、語感から、別の用紙に書かれた Entwurf (草案=下書き) があり、それを新たな紙葉に書き写したものと、考える読者もいると思われる。しかし、『ドイツ・イデオロギー』については、最初から、マルクス/エンゲルスは、同じ用紙を使って Druckvorlage (印刷用原稿) を作成する考えであったとみてよい。全ての用紙を二つ折りして右半分を白紙にしておく、という方針がとられたが、これは、左半分に Entwurf (草案=下書き) でもある基底稿を書き下ろし、読み返す際、右の余白で訂正や補完を行い Reinschrift (清書) とし、編集上の修正を加え、これらが完了したものを Druckvorlage (印刷用原稿) とするというやり方である。H¹¹ には H^{5a-c} に劣らぬ数多の修訂正がみられるが、MEGA² I/5 の編集者がそうした H¹¹ を Druckvorlage (印刷用原稿) と性格付けているのは、ここでのテキストが、編集も終えたテキスト、印刷直前まで整備されたテキストになっていると判断したからであろう。

『イデオロギー』第1章「フォイエールバッハ」のマルクスのページ付けで17ページ（以下、M17）には、資本主義下の分業（社会的分業）の固定化が共産主義社会ではなくなることを論じた箇所がある。

「他方、各人が活動の排他的領域を持つのではなく、むしろそれぞれ任意の部門で自分を発達させることができる共産主義社会においては、社会が全般的生産を規制し、まさにそのことによって私は、今日はこれをし、明日はあれをすることができるようになり、狩人、漁師、牧人あるいは批判家になることなしに、私がまさに好きなように、朝には狩りをし、午後には釣りをし、夕方には牧畜を営み、食後には批判をするということができるようになる」（服部文男監訳版(1996), p. 44, 下線部はマルクスの挿入）。

研究史でこの箇所はマルクス／エンゲルスが未来社会像を語った箇所としてしばしば言及されてきた。また、研究史では、特に基底稿の筆跡がエンゲルスならその執筆を主導したのはエンゲルスだ、という立場の研究者から、ここでの共産主義社会像について、酷評がなされてきた。

例えば、望月清司によれば、この部分は、エンゲルスの「ウルトラ牧歌的な共産主義社会像」（望月(1973), p. 213）を示す箇所で、マルクスはこうしたエンゲルスの認識を共有したくないので、「寸鉄の加筆をふるい」（同）、上記下線部分を挿入して「この一節を徹底的に茶化し」（同）なのだ、という⁽¹¹⁾。

ここで留意すべきことの第1は、M17のLayer1には同音異義語の書き損じを見出すことはできないものの、16カ所の即時異文があることだ。この出現頻度はH^{5c}と何ら変わるものではなく、ここでもマルクス口述・エンゲルス筆記がなされたと仮定することが妥当であろう⁽¹²⁾。またこのように仮定しない限り、この即時異文の出現頻度を合理的に説明することは無理であろう。

ここで留意すべきことの第2は、当該箇所（「朝には狩りをし、午後には釣りをし、夕方には牧畜を営み」）のテキストは、マルクスが口述した基底稿テキストと異なることである。いまやこの違いの含意を読み取る必要がある⁽¹³⁾。

以下、当該箇所の原文を、時系列に即して、すなわち、基底稿 → 後刻異文（エンゲルスによる訂

(10) 大村編(2018)第1章「新MEGA版『ドイツ・イデオロギー』の刊行を報じるIMES事務局長のプレスリリース」（大村執筆）、第6章「唯物史観の成立に関する廣松渉のエンゲルス主導説批判」（渋谷執筆）、第7章「マルクス社会理論の形成」及び第8章「イデオロギー批判は、いつ、いかにして、成立したのか」（渡辺執筆）、参照。フォイエールバッハに関するテーゼと『ドイツ・イデオロギー』との関係は渋谷のこの第6章が詳しい。

(11) 望月の当該箇所の解釈は、廣松渉が先鞭を付けていて、廣松が、当該箇所にマルクスが挿入したことで、「当の文章を冗談めかしたものに変えた」（廣松(1974), p. 98）と述べていることに深く学んだ（望月(1973), p. 222）、という。

(12) このページの右欄のエンゲルスの筆になる長文の書き入れも、即時異文の数はかなり多い。これも口述筆記の可能性を否定できない。

(13) 望月は両者の違いを知っているが、元の記述にも批判的である（望月(1973), 参照）。基底稿の記述をエンゲルスのものだと思い込んでいるからであろうか。

正) → 最終テキスト (含マルクスの修正) の順に掲げよう。M17 には、次のような修訂がある (原文は Online 版からの引用。引用に際し、彩色を網掛け、枠囲い等に変更した)。

① Morgens Shuhmacher Nachmittags Gärtner, Abends Schauspieler zu sein, wie ich gerade Lust habe. 「私がまさに好きなように、朝には靴屋、昼には庭師、夜には俳優になることができる」 (エンゲルス筆跡 = マルクス口述) (Online 版, M17_2 基底稿 下から 4-1 行目)

↓

② Morgens Shuhmacher zu jagen, Nachmittags Gärtner zu fischen, Abends Schauspieler zu Viehzucht zu treiben, ohne je Jäger Fischer oder Hirt zu werden. sein, wie ich gerade Lust habe. (エンゲルス修正 M17_3-1 (L,R), 下から 4-1 行目 網掛けは削除, 枠囲いは置換を意味する) 訂正置換後の原文を翻訳すると下記ようになる。

「狩人, 漁師, 牧人になることなしに、私がまさに好きなように、朝には狩りをし、昼には漁をし、夜には羊を追うことができる」 (下線部は訂正置換部分)

これがさらにマルクスによって次のように補完された。

↓

③ Morgens Shuhmacher zu jagen, Nachmittags Gärtner zu fischen, Abends Schauspieler zu Viehzucht zu treiben u. nach dem Essen zu kritisieren, ohne je Jäger Fischer oder Hirt oder Kritiker zu werden. sein, wie ich gerade Lust habe.

これを翻訳し、マルクスの補完 (書体を Arial で示す) に下線を付して挿入すると次のようになる (再掲)。「狩人, 漁師, 牧人あるいは批判家になることなしに、私がまさに好きなように、朝には狩りをし、午後には釣りをし、夕方には牧畜を営み、食後には批判をするということができるようになる」 (マルクス補訂 M17_3-2 (R), 下から 1 行目)

なぜこのような修訂が行われたのか。

最初のイニシアチブはエンゲルスがとったのであろう。

エンゲルスは「朝には靴屋、昼には庭師、夜には俳優」を「朝には狩りをし、昼には漁をし、夜には羊を追う」と書き換えた。

「靴屋」と「狩りをする (狩人)」、庭師と「漁をする (漁師)」、俳優と「羊を追う (牧人)」は全く違う職種になる。他方、既掲の服部訳で「他方」から始まる引用文直前の記述には、自然発生的な分業によって、各人は「活動の特定の排他的な領域を持つ」ようになり、その領域が彼に押しつけられ、そこから彼は抜け出すことができない、「彼は、狩人、漁師、あるいは牧人」 (服部文男監訳版 (1996), p. 44), と断じた箇所がある。これはマルクスが口述したものである。おそらくエンゲルスは、この口述 (筆記) 内容を念頭に置いて上記②の修正をしたのであろう。「他方」の前後で職種に関する事例を統一するためである。

しかし単純な統一ではない。既掲の「他方」で始まる引用文の冒頭に記されていたように、共産

主義社会では、「各人が活動の排他的領域を持つ」ことはなくなり、「それぞれ任意の部門で自分を発達させることができる」ようになるので、狩人、漁師、あるいは牧人という職業の内容を示す「狩り」や「漁」、「羊を追う」ことを時間決めて、一日に交互にやることができるようになる、という趣旨に変え、このことを念押しするように、「狩人、漁師、牧人になることなしに」という一句も加えたのであろう。

③はマルクスのこのエンゲルスの変更の最終的な手入れである。マルクスは、「あるいは批判家になることなしに」と、そして「食後には批判をする」を挿入した。このマルクスの挿入をどう読むか。

この点をはっきりさせるには、同時になされた次の追加もみておく必要がある。ここでのこの挿入を行ったとき、マルクスは同時に、「他方」の前の上掲文言の「狩人、漁師、あるいは牧人」にも手を加え、これを「狩人、漁師、あるいは牧人あるいは批判的批判家」(服部文男監訳版(1996), p. 44, 注(44)及び Online 版, M17, R3-1, 参照)にしていた。こちらに加えたのは「あるいは批判的批判家」であった。

最初の「朝には靴屋、昼には庭師、夜には俳優」という口述で強調されていたのは何か。靴屋及び庭師は肉体的労働で、俳優は精神的労働である。この違いは、最初に口述した際、マルクスは、共産主義社会では、肉体的労働と精神的労働との区別がなくなる、一人の人間が一日の間に、両方することも可能になる、ということ述べてようとしていたことを意味する。

エンゲルスの修正②でも、自然発生的な分業の発展の結果生じる固定化された職業分化が、共産主義社会でなくなることは明示的だ。しかしこの事例では、共産主義社会で肉体的労働と精神的労働への社会的総労働の固定化がなくなることは不明である。そこでマルクスは、前の方には「あるいは批判的批判家」を加えて、「狩人、漁師、あるいは牧人あるいは批判的批判家」にし、後の方は「あるいは批判家になることなしに」及び「食後には批判をする」を挿入したのであろう。批判的批判家というのは、当時の言葉では、批判を生業にする集団のことで、代表者がバウアーである。

マルクスは、「批判的批判家」を挿入することで、職業が固定化する社会では、批判を生業にする「批判的批判家」という集団さえ生み出すことになる、肉体的労働と精神的労働との分離が極端にまで推し進められることを示唆し、共産主義社会では、朝に続けて昼にも肉体的労働をした人物が、夜には批判することもできること、特殊な生業としての「批判的批判家」ではなく、また特殊な職業としての批判家としてでもなく、「食後には」、農耕牧畜をするのと同様に批判することも可能になる、こうして共産主義社会では、肉体的労働と精神的労働との分裂という事態も解消する、と述べたのであろう。

このように考えると、ここではエンゲルスの形式的なテキスト修正をマルクスは受け入れると同時に、最初の口述の際のテキストの趣旨を、最後に復活させたと言うべきであろう。

むすびに代えて：『ドイツ・イデオロギー』成立におけるエンゲルスの貢献

草稿『ドイツ・イデオロギー』の成立に果たしたエンゲルスの役割は何か。彼の最大の貢献は、マルクスの討論相手になり、マルクスの口述するところを正確に、ときには補完修正しながら紙上に写したことであろう。そしてマルクスの唯物史観を誰よりも早く共有し、その後の様々な著作や労働運動の進展に寄与することになったことであろう。

『ドイツ・イデオロギー』の成立で、エンゲルスの貢献をより厳密に確定するには Online 版の検討が必要不可欠だと思われる。橋本の拙編著への書評に対するリプライで筆者は次のように述べた。Online 版の Layer2 に収録された H^{5a-c} の基底稿を通読すれば、『ドイツ・イデオロギー』第 1 章「フォイエルバッハ」のそもそもの出発点がどのようなものであったのか、言葉を換えれば、マルクスがエンゲルスに最初に口述した唯物史観の定式化が具体的にはどのようなテキストであったのかを知ることができる。MEGA² I/5 のテキスト部 (Layer4=final text) では第 2 章「聖ブルーノ」や第 3 章「聖マックス」にリシャッフルされ、第 1 章の関連箇所からは痕跡さえなくなった箇所を含めた検討が可能となる。マルクス及びエンゲルスが基底稿の推敲過程で最初の定式化をどのように彫琢し最終テキストに仕上げたのか、また H^{5a-c} がリシャッフルされ、第 1 章「フォイエルバッハ」が生まれたのはなぜか。この問題は Layer3 を検討することで明らかとなろう。即時異文、後刻異文が基底稿と関連付けられ、しかも Layer1, 3 ではマークしてテキストに組み込まれているので、異文の時系列検討が容易である。読者諸兄姉の Online 版の活用と初期マルクスの研究でパラダイム転換が進むことを期待したい。

こうした Online 版に関する筆者の期待はいまも変わらない。もっともアジア圏では、マルクス／エンゲルスの作品をオリジナルで検討しようと呼びかけても、やはり限界がある。議論を広範囲に進めるには、原文を忠実に再現した翻訳が必要となる。筆者は Online 版編集時のメンバーの協力を得て、①基底稿、②基底稿＋後刻異文、③テキスト注解を中心にした翻訳を準備中である。中国でも同種の企画があると聞く。これらをベースに上記リプライの呼びかけが広く浸透することを期待して本稿のむすびに代えよう。

引用、参考文献一覧（本文及び注記では、以下の見出しのみを掲げている）

1) 『ドイツ・イデオロギー』原典（刊行順）

Rjazanov, David (1926), „*Marx und Engels über Feuerbach. Der erste Teil der „Deutschen Ideologie“.*

Einführung des Herausgebers.“ Marx-Engels-Archiv, Bd.1. Frankfurt am Main-West: Marx-Engels-Archiv-Verlags G.M.B.H. (リャザーノフ版 (1926), と略称)

Marx, Karl and Engels, Friedrich (1932), *Die Deutsche Ideologie. Kritik der neuesten deutschen*

- Philosophie in ihren Repräsentanten, Feuerbach, B. Bauer und Stirner, und des deutschen Sozialismus in seinen verschiedenen Propheten. 1845–1846.* Marx-Engels-Gesamtausgabe, I. Abteilung, Band 5. Berlin: Marx-Engels-Verlag G.M.B.H. (MEGA¹ I/5)
- Marx, Karl and Engels, Friedrich (1972), *Karl Marx, Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA) Proband.* Berlin: Dietz Verlag. (MEGA² 試作版)
- Marx, Karl and Engels, Friedrich (1974), Hrsg. v. Wataru Hiromatsu: *Die deutsche Ideologie: Kritik der neuesten deutschen Philosophie in ihren Repräsentanten, Feuerbach, B. Bauer und Stirner, und des deutschen Sozialismus in seinen verschiedenen Propheten.* 河出書房新社 (廣松版)。
- カール・マルクス, フリードリヒ・エンゲルス (1996) 服部文男監訳『ドイツ・イデオロギー』, 新日本出版社。 [Marx, Karl and Engels, Friedrich, Hattori, Fumio SV tr., *Doitsu Ideologie*, Shin Nihon Shuppansha, 1996]
- カール・マルクス, フリードリヒ・エンゲルス (1998) 渋谷正編訳『「ドイツ・イデオロギー: 序文」第1巻 第1章 (草稿完全復元版)』, 新日本出版社。 [Marx, Karl and Engels, Friedrich, Shibuya, Tadashi ed., tr., *Doitsu Ideologie: Jobun, Vol. 1, chapter 1, (Soko Kanzen Fukugen-ban)*, Shin Nihon Shuppansha, 1998]
- Marx, Karl, Engels, Friedrich and Weydemeyer, Joseph (2004), *Die Deutsche Ideologie: Artikel, Druckvorlagen, Entwürfe, Reischriftenfragmente und Notizen zu I. Feuerbach und II. Snakt Bruno.* Marx-Engels-Jahrbuch 2003. Berlin: Akademie Verlag (MEGA² I/5 先行版)
- Marx, Karl and Engels, Friedrich (2017), *Deutsche Ideologie. Manuskripte und Drucke.* Marx-Engels-Gesamtausgabe, I. Abteilung, Band 5. Berlin: De Gruyter Akademie Forschung. (MEGA² I/5)

2) 引用, 参考文献 (刊行順)

- Mayer, Gustav (1920), *Friedrich Engels. Eine Biographie* Bd. 1: Friedrich Engels in seiner Frühzeit. Berlin, Verlag von Julius Springer, 1920; Zweite Auflage, 1932.
- 望月清司 (1973), 『マルクス歴史理論の研究』, 岩波書店。 [Mochizuki, Seiji, *Marx Rekishi Riron no Kenkyu*, Iwanami Shoten, 1973]
- 廣松渉 (1974), 『マルクス主義の成立過程』, 至誠堂。 [Hiromatsu, Wataru, *Marx Shugi no Seiritsu Katei*, Shiseido, 1974]
- Grandjonc, Jacques (1993), *Editionsrichtlinien der Marx-Engels- Gesamtausgabe (MEGA)*, Dietz Verlag, Berlin. (後に『マルクス／エンゲルス・マルクス主義研究』第32号, pp. 86–93, 1998年に全訳)
- 大村泉・渋谷正・窪俊一編 (2015), 『新 MEGA とドイツ・イデオロギーの現代的探究』, 八朔社。 [Omura, Izumi, Shibuya, Tadashi and Kubo, Shunichi eds., *Shin MEGA to 'Doitsu Ideologie' no Gendaiteki Tankyu*, Hassakusha, 2015]
- 大村泉 (2017), 「口述筆記説に基づく『ドイツ・イデオロギー』—— I. Feuerbach のオーサーシップ再考」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第59号, pp. 17–50, 2017年7月。 [Omura, Izumi, “Kojutsu Hikkisetsu ni motozuku ‘Doitsu Ideologie’: I. Feuerbach no Authorship Saiko”, *Marx Engels Marx Shugi Kenkyu*, No. 59, pp. 17–50, July, 2017]
- Omura, Izumi (2017), “Re-examining the authorship of the “Feuerbach” in *The German Ideology* on the basis of a hypothesis of dictation. Marx 1818 / 2018”, presented in a conference titled as *New developments on Karl Marx's thought and writings*, Lyon (France), pp. 27–29, September 2017.
- Bendien, Jurriaan (2018), https://marxandphilosophy.org.uk/reviews/15919_a-world-to-win-the-life-and-thought-of-karl-marx-by-sven-eric-liedman-reviewed-by-david-mcclellan/ (comment on the 27th June 2018)
- 大村泉編 (2018), 『唯物史観と新 MEGA 版「ドイツ・イデオロギー」』, 社会評論社, 2018年。 [Omura,

- Izumi ed., *Yuibutsushikan to Shin MEGA ban 'Doitsu Ideologie'*, Shakai Hyoronsha, 2018]
- Omura, Izumi (2018), “Re-examining the Authorship of the Feuerbach Chapter in *The German Ideology* on the basis of a Hypothesis of Dictation”, *The European Journal of the History of Economic Thoughts*, Marx special issue, Vol. 25(5), October 2018, London and New York: Routledge.
- 橋本直樹 (2019), 「書評, 大村泉編『唯物史観と新 MEGA 版「ドイツ・イデオロギー」』, 社会評論社, 2018 年」『季刊経済理論』第 56 卷第 3 号, pp. 79–82。[Hashimoto, Naoki, “Shohyo, Omura Izumi ed., *Yuibutsushikan to Shin MEGA ban 'Doitsu Ideologie'* (Shakai Hyoronsha, 2018)”, *Kikan Keizai Riron*, Vol. 56, No. 3, pp. 79–82, 2019]
- 玉岡敦 (2019), 玉岡敦・窪俊一・大村泉・渡辺憲正訳「解題」(MEGA² I/5, Einführung, S. 725ff. の翻訳) 『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』, 第 60/61 号, pp. 77–149。[Tamaoka, Atsushi, Kubo, Shunichi, Omura, Izumi and Watanabe, Norimasa tr., “Kaidai”, *Marx-Engels-Marx Shugi Kenkyu*, No. 60/61, pp. 77–149, 2019]
- 大村泉 (2019), 大村泉・窪俊一・渡辺憲正訳「成立と伝承」(H⁵: フォイエルバッハ章のための手稿の東) (MEGA² I/5, Entstehung und Überlieferung [Konvolut zu Feuerbach], S. 832ff. の翻訳), 『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』, 第 60/61 号, pp. 151–178。[Omura, Izumi, Kubo, Shunichi and Watanabe, Norimasa tr., “Seiritsu to Densho” (H⁵: Feuerbach Sho no tameno Shuko no Taba), *Marx-Engels-Marx Shugi Kenkyu*, No. 60/61, pp. 151–178, 2019]
- 黒滝正昭 (2020), 「『ドイツ・イデオロギー』は「マルクス口述・エンゲルス筆記」の産物か? ——大村泉説の吟味」, 『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』第 29 号, pp. 45–60。[Kurotaki, Masaaki, “*Doitsu Ideologie* wa ‘Marx Kojutsu-Engels Hikki’ no Sanbutsu ka?: Omura Izumi Setsu no Ginmi”, *Miyagi Gakuin Joshi-Daigaku Jinbun-Shakaikagaku Ronso*, No. 29, pp. 45–60, 2020]
- Omura, Izumi (2020), “Re-examining the Authorship of the Feuerbach Chapter in *The German Ideology* on the basis of a Hypothesis of Dictation”: in Gilbert Faccarello and Heinz D. Kurz eds., *Marx at 200: New Developments on Karl Marx’s Thought and Writings*, Routledge.
- 大村泉 (2020), 「橋本直樹書評 (本誌第 56 卷第 3 号) へのリプライ——『ドイツ・イデオロギー』 Online 版 (暫定版) の紹介を兼ねて」『季刊経済理論』第 57 卷第 3 号, pp. 109–112。[Omura, Izumi, “Hashimoto Naoki Shohyo (Honshi Vol. 56, No. 3) eno Reply: *Doitsu Ideologie* Online edition (Zanteiban) no Shokai wo kanete”, *Kikan Keizai Riron*, Vol. 57, No. 3, pp. 109–112, 2020]

要旨: 2007 年来, 筆者は, 『ドイツ・イデオロギー』の Online 版の編集に取り組んできた。Online 版 (暫定版) は, 現在既に公開中である。本稿では最初に Online 版の編集の目的を明らかにし, 次いでその編集方法や編集過程, 構成上の特徴を MEGA² I/5 との対比の上で明らかにする。最後に, Online 版の編集を通じて明らかになった研究成果の事例紹介を試みる。

キーワード: マルクス, エンゲルス, 『ドイツ・イデオロギー』 Online 版, 口述筆記説, 唯物史観